

〔講演会報告〕

アンステイチュ・フランセ「読書の秋」
オンライン講演会
ローラン・ビネを迎えて
——フィクションと歴史叙述——

久保昭博

2020年10月27日、関西学院大学文学部フランス文学フランス語学専修は、アンステイチュ・フランセ主催の文化イベント「読書の秋」の一環として、「ローラン・ビネを迎えて——フィクションと歴史叙述——」と題した講演会を開催した。2014年以降、本学では毎年この「読書の秋」をアンステイチュ・フランセと共催しており、今年は7回目となる⁽¹⁾。通常であれば紅葉が始まる時期の上ヶ原キャンパスに作家を迎え、学生やフランス文学に関心のある市民からなる聴衆とのあいだで交流が行われるのだが、今年はコロナ禍という状況のため、フランス文学フランス語学専修共同研究室と作家の自宅を結ぶオンラインでの開催となった。講演会独特の「場」や「空気」を、作家ならびに聴衆と共有できないことは残念であったが、他方では地理的制約がなくなることから、160名程度という数多くの参加者に恵まれ（フランスからの視聴者もいたようである）、オンラインイベントのポジティブな側面もみられた。なにはともあれ、このような特殊な状況にもかかわらず、例年通り「読書の秋」の開催を可能にしてくれたアンステイチュ・フランセの関係者の方々、今回の講演会のために「フランス文学史」の授業枠を提供してくれたのみならず、当日の運営においてもご協力いただいた松浦菜美子助教、対談を視聴してくれた参加者の方々、そしてなによりローラン・ビネ氏に感謝を申し上げたい。

*

ローラン・ビネ (Laurent Binet) 氏は、1972 年生まれの小説家。近代文学の
アグレガシオン
 教授資格をもち、リセや大学で教鞭を執った経験もある。これまでに刊行された
 主要な作品としては、第二次世界大戦中に（現在の）チェコの統治にあたって
 いたナチス親衛隊の実力者ラインハルト・ハイドリヒを暗殺する〈類人猿作
 戦〉をテーマにした『HHhH』（2010 年）や、批評家ロラン・バルトの死が、
 じつは自動車事故ではなく、ロマン・ヤコブソンが発見した言語の第七の機能
 ——あらゆる人を説得しうる機能——についての草稿をめぐる殺人事件であっ
 たという設定に基づいたミステリー仕立てのインテリ・セレブ群像劇『言語の
 七番目の機能』（2015 年）、そして今回の対談で中心的にとりあげた『複数の
 文明』（2019 年）がある⁽²⁾。この最後の作品は、グリーンランドを植民したノ
 ース人たちがアメリカ大陸を南下し、南米に鉄と馬と抗体を持ち込んでいたら
 ……という仮説に基づいて、16 世紀以降のヨーロッパとアメリカ大陸のパワ
 ーバランスを逆転させた大胆な歴史改変小説（フランス語では « uchronie » と
 呼ぶ）だ。彼が描く「そうであったかもしれない歴史」では、コロンブスはキ
 ューバに住んでいた先住民族のタイノ族に囚われてアメリカを「発見」するこ
 とができず、逆に権力争いに破れてインカ帝国からスペインに海路で逃げてき
 たアタワルパ（史実ではコンキスタドールのフランシスコ・ピサロによって
 1533 年に殺害される）が、カール五世を倒して神聖ローマ帝国の支配者とな
 っているのである。

この簡単な紹介からも理解されるように、ローラン・ビネ氏の小説の中心に
 は、常に歴史への眼差しがある。だがそれとともに見逃すことができないの
 が、文学、さらにいえばフィクションの可能性をめぐる思索である。たとえば
 『HHhH』では、作家本人を想起させる語り手「僕」が、フィクション的創作
 によって現実へと接近するという自らの方法論の説明や、それに対する自分の
 疑念や批判などを繰り返す。『言語の七番目の機能』においては、物語の後半

にさしかったところで、主人公の一人である文学研究者シモン・エルゾグが、自分はフィクション＝小説の中の登場人物ではないのかと自問しはじめ、さらに自分を創りだしたはずの小説家との関係について問いかける。そして、歴史改変小説というジャンルを採用した『複数の文明』が、フィクションについての問いをその中心に置いていることは言うまでもない。この小説の語り手は、読者である私たちにとってはフィクションであることが自明な物語を、あたかも「もう一つの世界」の現在に生きる「真面目な」歴史家のように語っているのである（たとえばその世界では、印刷術の産物は「書物 (livres)」ではなく、一貫して「話をする紙片 (les feuilles qui parlent)」と呼ばれる)。さらに「改変」は、大文字の歴史だけに留まらない。本書の最終章には、セルバンテスが登場する。追われる身となった彼は、画家エル・グレコと出会ってスペインからフランスへと旅をし、ついには疫病に冒されたこの地でモンテーニュが住む城の塔に身を隠すという「ドン・キホーテ的」な半生を送ることになるのである。フィクションと現実が反転するかのようなこのエピソードは、巻頭言に置かれた「歴史が殺したものに、芸術は生をあたえる」というカルロス・フエンテスの言葉とともに、小説＝フィクションへのオマージュとして書かれたのではないだろうか。

*

以上のような問題意識から「フィクションと歴史叙述」というサブタイトルをつけた今回の講演会は、ビネ氏の希望により「対談」という形式をとった。ビネ氏の三作品を紹介したのち、まず久保が、次に松浦が作家に質問を投げかけ、最後に視聴者からの質問を（テキストで）受け付けるという進行である。事前の打ち合わせなしに行われた日本の読者とフランスの作家のあいだの直線的でないやりとりは、報告文体に切り詰めてしまうとその興味や内容がずいぶん殺がれてしまいそうに思われる。それゆえここでは、対話形式でこの対談の再録を試みることにしよう。もちろん、筆者による整理が大幅に入っているこ

とは言うまでもない。

それではここで、ビネ氏にご登場いただきよう。

——まず、アンステイチュ・フランセの関係者や参加して下さっている方々に御礼を申し上げたい。今回、このような状況のために、日本を訪れる機会を失ったことが、そして皆さんの顔が見られないことはかえすがえすも残念だが、それでも講演会がこうして実現されたことは嬉しい。

さて、あなた（＝久保）がいま述べた、私の小説では歴史叙述とフィクションが主要な問題関心となっているのではないかということについてだが、それはまったくそのとおりである。自分にとって、歴史叙述の問題とフィクションの問題は不可分だ。『HHhH』はいかにして「本当の歴史」を語れるか、『言語の七番目の機能』と『複数の文明』は、いかにして、あるいはいかなる条件で歴史を変えられるかという問いを課したものだが、どちらの場合でもフィクションが「偽造（falsification）」になるリスクを避けるよう心がけている。また、フィクションがどのような「価値」を歴史に加えられるかということも関心事のひとつである。多くの歴史小説は、歴史を単なる「シナリオ」に貶めることで、むしろ歴史を矮小化しがちだから。

——それでは最新作『複数の文明』をめぐるいくつかの質問をしたい。あなたのこれまでの著作が現代史に題材をとったものであるのに対し、本作で扱われているのは16世紀である。この歴史的パースペクティブの変化はいかなる要因によるものなのか。

——『複数の文明』の起源には偶然的要素がある。というのも、ペルーのブックフェアに参加した際に、偶然、コロンブス到着以前の南アメリカ世界に関心をもつようになったからだ。これに自分が常に持っていた歴史改変小説に対する興味が加わる。このジャンルは、たとえばナチスドイツが第二次世界大戦に勝利していたら……というような世界を好んで描くが、こうした観点からこのジャンルの可能性を考えたとき、世界史全体を変えるような数少ない出来事のひとつとして、コロンブスによるアメリカ大陸の発見が浮上したというわけ

だ。こうして出発点を定めたあとに重要になるのが、このオルタナティブな歴史を「信憑性のある (crédible)」ものにするということとなる。そこで私が参考にしたのが、ジャレド・ダイヤモンドが述べていた文明史的仮説である。彼は、ヨーロッパとそれ以外の文明間のパワーバランスに不均衡が生じた原因を、鉄・馬・病原菌という三つの要素に求めた。そこで自分が考えたのが、ヴァイキングがアメリカ大陸に残り、これら三つの要素をこの大陸に持ち込んでいたらという仮説だ。

じつはこのように歴史に「もし」を持ち込む発想は、かつて自分も遊んでいた『Civilization』というビデオゲームに通ずるところがある。この本のタイトルを、(フランス語の正書法である) *Civilisation* ではなく、(英語式の) *Civilizations* にした理由のひとつもそこにある。あと一つ付け加えるなら、Sの代わりにZを使ったもう一つの理由には、前著『言語の七番目の機能』で取り上げたロラン・バルトの主著の一つ『S/Z』への目配せもある。

——「文明」という語をフランス語の正書法に背いて英語式に「Z」を用いて書いた理由はよく理解できた。だが、タイトルについても一つ質問をさせてもらいたい。なぜ *Civilizations* と複数形にしたのか。

——まず、単純にこのビデオゲームと重複しないようにという配慮がある。だがより重要なのは、複数形の「S」を付けることによって、文明の「脱中心化 (décentrement)」と「多元性 (pluralité)」を示したかったという意図である。ここで「脱中心化」というのは、ヨーロッパ中心主義に陥らないということはもちろんだが、さらにはインカであれなんであれ、一つの文明を絶対視しないということも意味している。

——しかし『複数の文明』を読んでいると、この本が描いているように、実際にヨーロッパがインカに征服されていたら、プロテスタントとカトリックのあいだの残忍な宗教戦争がなかったはずだなど、実際の歴史よりも「より良い」世界が実現されたようにも感じられてしまう。

——それはちがう。「異なる」世界ではあるが「より良い」世界というわけではない。歴史を調べれば分かることだが、インカ帝国は、ヨーロッパよりも

帝国主義的で拡張主義的な国家であった。この『複数の文明』で示したオルタナティブな歴史が「より良い」世界を描いたものではないということは、私の小説の第4章をみれば明らかなはずだ。この章ではセルバンテスが主要な登場人物となっているわけだが、その背景にあるのは、戦争が続いている世界である。つまりインカ帝国がヨーロッパを征服していれば歴史が「終わり」を迎えていたわけではなく、もしそうになっていたなら、こんどはキリスト教徒とイスラム教徒が手を結んでアステカ人と戦うだろうというように、歴史はまだ続いてゆくということを私はここで示したかったというわけなのだ。ちなみに本書のアタワルパは、エルナン・コルテスとフランシス・ピサロとカール五世を混ぜ合わせた人間として構想している。つまり征服者であり、国家元首である。

——このような歴史小説に対して歴史家はどのような反応を示しているのか。

——『HHhH』、『複数の文明』とも、歴史家からの反応はおおむね良いものだった。こうした好反応は、歴史に対する自分のアプローチがそれほど間違っていないということによるのだろう。だがそれだけではない。『可能な物事の歴史のために⁽³⁾』などが示しているように、現代の歴史家たちは、ある歴史的事実——たとえばヒトラーの政権掌握——を成立させた諸条件を考察する際に、「歴史的仮説」を好んで用いている。このように、歴史家の実践が歴史改変というジャンルに近づいているということも、私の小説が歴史家たちに受け入れられる背景にあるのだと思う。

——たしかに、「方法としてのフィクション」を唱えるイヴァン・ジャブロンカのような現代の歴史家の著作とあなたの小説のあいだには、通じる場所があるように思われる。さて、これまでの話で歴史家と小説家の共通性は見てきたようにも思うのだが、他方でフィクションということを考えるにあたって、歴史家と小説家を分かつポイントというものはあるのか。歴史家とは異なる小説家固有のフィクション概念というものは、もしそれがあるとすれば、どのようなものであると考えられるか。

——あなたの質問はずいぶん複雑で、答えるのが難しい。自分にとってフィ

クションとは、常に「仮説 (hypothèse)」である。別の言い方をするなら、フィクションとは、現実や歴史に対し、「より上級の真理 (vérité supérieure)」として自らを措定するものではないということだ。宗教や神話はこうしたことを行いがち、つまり現実に対して自らが「より上級の真理」であるとしばしば称しがちであり、その意味で危険なフィクションであると言える。

——つまり、フィクションが「超越的」たらんとしたときに危険が始まるということか。

——まったくその通りだ。そうしたフィクションにはつねに警戒心を抱いている。

——それではここで、松浦さんの質問に移りたい。

——まず、素晴らしく興味深いお話をさせていただいたことに感謝したい。私からは、あなたの小説の文体について質問をしたい。あなたの小説には、章の長さがまちまちで、しかもそれぞれが語り手による語り、引用、証言等々と異質なジャンルで構成されているという特徴が見られるが、こうしたスタイルは何に由来するのか。

——まずは短い章に対する個人的な好みというものがある。ただし、特に『HHhH』について言えることだが、この小説では、フィクションを用いることなく、事実の領域に留まりたいときに、歴史的事実として語り得ないことを、意識的に「穴」や「空白」としてそのまま残すという手法をとった。そうした「穴」や「空白」をテキスト上に具体化する際に重要なものが「省略 (ellipse)」だ。この小説では、それゆえ、章と章のあいだにしばしば見られるこの「省略」が非常に重要な役割を果たしているといえる。また、それに加え、自分は「言い過ぎるよりも足りないほうが好ましい」という小説美学を信じているということも言い添えておきたい。

——あなたの小説では、フランス文学への参照や目配せが数多く見られる。フランス文学史の潮流のなかに、ご自身をどのように位置づけているのか。

——私はミラン・クンデラが言ったように、すべてが「鎖の環」のようにつ

ながっているという考え方が好きだし、また、他のテキストとのインターテキスト的な対話というものも好んでいる。現代のフランス文学のメインストリームはオートフィクションであり、自分が作るような歴史を題材にした小説というのは、むしろ非主流的だというように認識しているが、それはともかくとして、自らの好みや嗜好をこうしたインターテキストを通じて示すことは大事なことだと考えている。また、フランス文学への言及が多いということは、自分の受けてきた教育を考えればたしかにそうなのだが、ただ、現在では南米の文学やフランス語圏文学などにも強い関心を抱いている。文学とは国際的な事柄であるというのが、私の信条だ。

*

講演会は、視聴者からテキストで寄せられた質問に対する回答で終わった。ここでは特に印象に残った一つのやりとりを紹介しておこう。「未来については書かないのですか」という質問に対するビネ氏の回答である。

——自分を魅了するもの、それは起こってしまったことの不可避性、宿命に対するメランコリーな関係である。過去は過去であり、何をしてしても変えられない。過去が未来より文学的素材として優れているのだとしたら、それは、過去には悲劇的次元が備わっているからだ。

注

- (1) 「読書の秋」の一環としてこれまでに本学に迎えた作家は以下の通りである。ジャン・ルオー (2014)、ピエール・ルメートル (2015)、デルフィーヌ・ド・ヴィガン (2016)、フィリップ・フォレスト (2017)、オリヴィエ・ゲーズ (2018)、マリアヌ・ジェグレ (2019)。
- (2) それぞれの書誌情報は以下の通り。
 Laurent Binet, *HHhH*, Grasset, 2010.
 — *La Septième fonction du langage*, Grasset, 2015.
 — *Civilizations*, Grasset, 2019.
 なお高橋啓による『HHhH』と『言語の七番目の機能』の邦訳が、それぞれ2013

年と 2020 年に東京創元社より刊行されている。『複数の文明』は未邦訳（2021 年に東京創元社より刊行予定）。

- (3) Quentin Deluermoz, Pierre Singaravélou, *Pour une histoire des possible*, Seuil, 2016.

(関西学院大学文学部教授)